



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	主体的かつ総合的な日本語運用活動を可能とするポスター発表クラスの試み
Author(s)	副田, 恵理子; Soeda, Eriko; 平塚, 真理 他
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 10, 73-87
Issue Date	2006-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45661
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC010_004.pdf



主体的かつ総合的な日本語運用活動を可能とする ポスター発表クラスの試み

副田恵理子・平塚真理

要 旨

本稿では、様々な言語知識や技能を総合的に、かつ主体的に運用する活動を取り入れた『ポスター発表クラス』の授業内容を報告する。このクラスでは、最終日にポスター発表を行い、初回から発表前まではそれに向けての準備活動を行っている。この過程で、各自選んだテーマについての情報収集、発表内容・構成の検討と組み立て、原稿作成、発表練習などのタスクに加え、原稿・ポスター作成のために必要な日本語ワープロ指導や質疑応答の練習を行う。授業の形式は、講義形式や、教師と学生または学生間のやり取りのセミナー形式、教師と学生1対1の個別指導など、内容と活動によって様々なスタイルを試みている。

ポスター発表に対する学生からのコメントでは、「いい練習になった」「おもしろかった」という肯定的な意見が聞かれた一方で、同時に全員が発表を始めると話しぶりが、聞きづらい、という意見も出され、発表方法による問題点が明らかになった。以前行っていた口頭発表と比べると、発表者はより聞き手を意識した発表を行っており、聴衆との間にはより活発なやりとりが見られた。また、大学ロビーを使用して発表を行ったことで、面識の無い不特定多数の人を聴衆とすることが可能となり、よりオーセンティックなインタラクションを行う機会が作れた。

〔キーワード〕 ポスター発表、総合的な日本語運用活動、短期留学生、発表者と聞き手、プレゼンテーション

1. 実践の背景

本稿では、主に中級レベルの短期留学生を対象とした『ポスター発表クラス』の授業活動を報告する。このクラスは、北欧からの短期留学生を対象とした7～15週間の短期集中日本語コースの1クラスとして開講されているものである。このコースで『ポスター発表クラス』を行っているのは

以下のような理由による。

北欧からの短期留学生の多くは、自国で日本語を知識としては習得しているものの、実際に使う機会が少ないために、その運用力に伸び悩みを感じている。こうした学生が、短期間に総合的な運用能力を身につけるには、齋藤（1999）が指摘しているように、日本人との実際のコミュニケーションの機会を拡大し、様々なスキルの使用を促すポスター発表のような活動が効果的だと思われる。ポスター発表はその準備段階から発表の場までを通して、様々な言語知識や技能を総合的に運用する必要があり、それを自ら選んだテーマについて主体的に行うことによって、より効果的に日本語運用力を伸ばすことが可能であると考えられる。

また、高校などで既に日本留学経験があり、運用力の高い学生もいるが、こうした学生の多くは友人とのインフォーマルな場面での日本語運用力は身につけているものの、フォーマルな場面に対応できない傾向がある。ポスター発表は、学生に面識のない人とのフォーマルなコミュニケーションの機会を与えるという点でも、大きな意義があると考えている。

加えて、ポスターや発表を録画したビデオを国に持ち帰ることで、自分の日本語力が目に見える形で残り、このコースで習得したものを学習者自身が実感できる。さらに、このコースを通してポスター発表という一つのことを成し遂げることによって、学生は日本語でこんなことが出来るようになったという達成感を得ることができる。これらはその後の学習意欲を高めることにも繋がると思われる。

2. 口頭発表からポスター発表への移行

この日本語コースでは、1997年から『口頭発表クラス』を導入していた。この時の発表形式は口頭発表で、人数の多い場合にはグループ発表、人数が少ない場合には個人発表であった。しかし、グループ発表の場合には個々の活動を公平に評価できない、また、個人発表にすると全体の発表時間が長くなってしまい、聞き手の負担が大きくなるなどの問題点があった。また、年々聴衆の数が減少していたことも問題となっていた。そこで、こうした問題を解決するため、2004年春から発表形式を口答発表からポスター発表へと移行した。このことにより、以下の点での変化を期待した。

- (1) ポスターがあることで、視覚的にも情報が提示できて、発表者と聞き手が内容をスムーズに共有しやすくなる。

山崎他（2003）が述べているように、ポスターを使用することによって発表者と聞き手が発表内容について視覚情報を共有することができ、特に日本語力の低い学生や発音がはっきりしない学生の場合には相互の理解にポスターが大きな助けとなる。以前の口頭発表でも Power Point などを使った発表は行っていたが、ポスターの場合には発表全体についての情報が発表者と聞き手のすぐそばに、常に提示されていることで、両者がいつでもポスターを活用できるというメリットがある。

(2) 発表者は聞き手との距離が近くなることで、聞き手をより意識した発表が可能になると同時に、相互に発話しやすい環境が作れる。

以前は、ホールを使用して口頭発表を行っていた。そのため、客席にいる聴衆に視線を配ることが難しかったようで、視線を上げずに原稿を読み続ける学生が非常に多かった。しかし、ポスター発表では、聞き手との距離が近く、目線も同じ高さにあるため、アイコンタクトが取りやすくなると思われる。

また、口頭発表では発表後に質疑応答の時間を設けていたものの、客席から距離のある発表者へコメントや質問が出ることはほとんどなかった。しかし、ポスター発表では発表者と聞き手の距離が近くなることで、相互に発話をしやすい環境となり、山崎他（2003）も述べているように「共話的なやり取り」が可能になるとと思われる。

(3) 聞く側も興味のある発表に積極的に参加することができ、活発なやり取りが期待できる。

口頭発表の時には、聞き手は、自分が足を運んだときに行われている発表を、自分の興味に関わらず聞かなければならなかった。しかし、複数の発表が同時並行して行われるポスター発表の形式にすることで、井之上（2005）が述べているように興味があるもののみを選んで聞くことが可能となり、聞き手も積極的に質問するなど、主体的にそのセッションに関わることが期待できる。

(4) さらに、大学のロビーを利用して発表を行うことで、より多くの日本人の参加が見込めた。

3. 本授業の特徴

ポスター発表に至るまでの授業では、東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会（1995）や国際交流基金関西国際センター（2004）、上村・

内田（2005）などのプレゼンテーションのテキストでも取り上げられているように、発表のテーマを決定しそのテーマについての情報を収集する、発表内容・構成を検討して原稿を書く、ポスターを作成する、発表・質疑応答の練習を行う等の準備過程を通して、情報収集能力の習得、原稿作成に必要な文章構成や表現の知識の習得、効果的なポスター作成技術、発表技術、質疑応答技術の習得を目指している。これらに加え、本授業では原稿・ポスター作成に必要な日本語ワープロ指導を取り入れている。本授業の対象者には、日本語ワープロを全く使用したことのない学生も含まれているが、近年、メールを含むほとんどの文書がコンピュータを使った日本語入力によって作成されるようになってきていることを考えると、日本語学習を続けていく中ではワープロの日本語入力技能の習得は必要不可欠である。また、山下（2002）でも指摘されているように、日本語入力においては、ローマ字から平仮名へ、平仮名から漢字への変換を行うために、促音や長音などの正しい発音の把握が必要となり、正確な発音の習得も促せる。日本語ワープロを使って正しい発音を把握しながら原稿を作成することは、その後原稿を読む（発表する）段階で正確に発音できることにもつながり、その点でも意義のある活動であると思われる。

日本人を対象としたテキストである上村・内田（2005）では、効果的なポスター作成の留意点として、字の大きさやレイアウトなど外観に関わる部分を取り上げている。本授業ではこれらに加え、表現面にも着目し、キャプションのつけ方の指導を行なっている。キャプションによく使われる連体修飾・体言止めといった技法は、学習者の多くが苦手としている文法項目である。これまで、学習者はこうした技法を新聞や雑誌の見出しなどで読むことはあっても、自ら使用する機会は少なかつたと思われる。しかし、日本語で物事を説明する際には頻繁に使われる技法であり、中級以降幅広い表現力を身につけるためには習得する必要がある項目である。

ポスター発表の形式については、これまでのポスター発表の実践報告の多くでは、グループによる発表が行なわれている（齋藤（1999）山崎他（2003）井之上（2005））。しかし、本授業では同時に多くの学生が発表できるというポスター発表のメリットを活かして、個人での発表を試みた。そのため、ポスター発表に必要な知識や技術の導入は講義形式で行なっているが、個々の学生の発表原稿チェックや発音練習は個別指導の形で行っている。これにより、個々の学生の弱点を改善することも可能になると考

えた。

4. 授業の概要

4.1 コースの概要

この日本語コースは、ノルウェーやスウェーデンなどの北欧からの主に中級レベルの短期留学生を対象としている。期間は学期・所属学部によって異なり、7～15週間の授業を行っている。授業は「文法クラス」「会話クラス」「漢字クラス」など週9コマ（1コマ90分）あり、その中の1コマが『ポスター発表クラス』である。

4.2. 授業のねらい

ポスター発表と、それに向けての準備を行う本授業では、次の(1)から(4)のような、書く・話す・聞く・読むに渡る様々な言語技能を使い、それらを総合的に運用する能力の養成と向上をめざしている。

- (1) 序論・本論・結論など、構成のまとまった発表原稿を作成する。
- (2) 情報を収集し、それを適切な表現を用いて聞き手にわかりやすく伝える。また、その情報をもとに、日本語で意見を述べる。
- (3) 日本語ワープロの使用法を習得し、原稿作成やポスター作りを行う。
- (4) 適切な話し方・発表態度により、フォーマルな場面で聞き手に配慮した発表を行う。

4.3. 授業内容

授業ではコースの終わりに予定されているポスター発表に向けて様々な準備を行う。授業の内容は、発表に必要な知識や技術の導入・指導と、そこで学んだことを学生自らが発表の準備作業の中で実践していく活動に分かれる。授業形式もその内容によって異なるスタイルでの指導を試みている。スピーチの組み立て方・話し方・ポスターの使用法などのプレゼンテーション概論と、原稿・ポスター作成のためのワープロ使用法は講義形式で導入し、発表や質疑応答の練習は教師と学生、または学生間のやり取りのセミナー形式で行う。また、個々の原稿チェックと発音練習は、教師と学生の1対1の個別指導の形で行っている。

このコースで行っているポスター発表は、いわゆる学会などでの発表と同様の形式で、ポスター掲示用のボードを一人一枚使用し、そこにB1程

度分のポスターを貼り出して発表するものである。発表者はポスターの前で待機し、聴衆が集まってきた段階でそれぞれ発表を開始する。発表の要点や、内容をわかりやすく提示したポスターを使いながら発表する。

次に、この授業の具体的な内容を、一学期13週間のコースの流れに沿って紹介する。スケジュールは表1のようにになっている。

表1：具体的なスケジュール

	導入・指導	活動・課題
第1週	オリエンテーション (ポスター発表とは)	ショートスピーチ(1)/テーマを考える
第2週	発表の構成	ショートスピーチ(2)/情報収集
第3週	発表で使う表現・接続詞の使い方	スピーチ内容の選択
第4週	(原稿作成のための) 日本語ワープロの使い方(1)	日本語ワープロ/ポスター発表の アウトライン(構成・内容)作成
第5週	(原稿・ポスター作成のための) 日本語ワープロの使い方(2)	日本語ワープロ 発表原稿(序論)作成
第6週	原稿チェック1	発表原稿(本論)作成
第7週	原稿チェック2	発表原稿(結論)作成
第8週	原稿チェック3	原稿をもとにスムーズに話す練習
第9週	ポスターの作り方	ポスター作成
第10週	質疑応答の仕方・発表時の話し方と態度	ポスターを使用した発表練習
第11週	効果的なポスターの使い方	リハーサル
第12週	ポスター発表	
第13週	ポスター発表のフィードバック	

左の部分が教師からの「導入・指導」、右の部分が学生自身が実践する「活動」である。授業時間が足りないため、「活動」の中の個人で行う作業の一部は宿題として課すことがある。

1週目は、講義形式でポスター発表の概要を紹介する。ポスター発表をよく知らない学生もいるため、過去の学期の発表のビデオを例として見せ、会場や聴衆の様子を把握できるようにする。ビデオを見て、その発表の良い点や改善点を考えた後、活動として、各自1分程度のショートスピーチ

を行う。スピーチ自体に慣れていない学生も多いため、少しずつ人前で話すことに慣れていくステップになる。また、この週は、次週までにスピーチのテーマを決めることを宿題として課す。スピーチのテーマはこちらから指定せず、学習者が自由に決める。自国の民話、アイヌ民族と自国の民族、自国の町、自国の祭り、イベント、自国の食べ物、日本や自国の歌手・俳優・作家、スポーツ（サッカー、釣り、スキー、スケート、バイアスロンなど）、日本刀の作り方など、それぞれ興味を持っていることを紹介する情報提供型の発表が多い。

2週目は、発表原稿作成のために必要な序論・本論・結論といった段落構成を講義形式で導入する。活動では、それを反映させて2度目のショートスピーチをする。この週の宿題として、自分の決めたテーマについての情報収集を課す。

3週目は、発表で用いる表現や接続詞などを講義形式で導入する。学習者は来日前のコースで文章を書く練習をしてきておらず、また、このコースでも作文の独立したクラスは無い。そのため、発表原稿作成に必要な文章の構成・表現の知識の導入は不可欠である。ポスター発表の準備を通して、文章作成に必要な知識や技術の学習も行なっている。

4週目・5週目は、日本語ワープロの使い方を指導する。4週目は原稿とポスターのキャプションなどの作成に必要な仮名／漢字入力・ルビ打ちなどの文書入力の基本的な操作を、5週目はポスターの作成に必要な絵の挿入などを含めた応用的な使用方法を導入・練習する。この時間の授業はコンピュータ室で行い、一人一台コンピュータを使って作業する。学習者は短い文書を書き写すといった作業でもワープロを使った入力では時間を要する。特に、拗音や長音、外来語特有の表記（スウェーデン・ノルウェー）の入力で間違いが多い。また、北欧からの留学生は発音の影響でや行とじゃ行の区別が難しく、その入力でも間違いがちである。このような不正確な入力では、そこから漢字への変換ができないことから、発音の認識の間違いに気づくきっかけにもなる。授業後半の活動は、ワープロの練習に加え、4週目にポスター発表で話す内容の絞り込み・アウトラインの作成を、5週目に発表の序論の作成を行う。

6週目から8週目は、作成した序論、本論、結論の原稿を教師と学生1対1で個別にチェックする。全体の構成・内容・文法・語彙などについて、これまで学習してきた知識が適切に運用できているかどうかを確認する。

また、原稿のチェックに加え、学生にそれを音読させることで発音の指導も行う。このように個別指導を行っている間、他の学習者は各自で原稿の修正や作成を進める。8週目は、原稿を“読む”のではなく、原稿をもとに、スムーズに“話せる”よう練習することを宿題とする。

9週目は、一通り原稿を書き上げたところで、その発表に用いるポスターの作り方を指導する。聞き手にわかりやすく伝わるポスターを作成するために、掲載すべき内容・適切な文字や絵の大きさと配置・キャプションのつけ方などを指導する。特にキャプションは、図の説明を「です・ます体」の文のままつけるなど、適切にできない学習者が多いので、文を簡潔にまとめるための連体修飾・体言止めなど、キャプションによく使われる技法を指導する。学習者はこれらを踏まえて、日本語ワープロを使ってポスターを作成する。

10週目は、声の大きさ・発音・話すスピード・フィラーの使い方などを含む発表時の話し方と、アイコンタクト・身ぶり・姿勢などの発表態度、また質疑応答の仕方について指導し、練習を行う。

11週目は、発表時の効果的なポスターの使い方を指導した後、クラスメートを聴衆としてリハーサルを行う。聴衆の反応から、自分の話すスピードや発音、態度などが適切かどうか確認する。学習者は、ここで他のクラスメートの発表を聞き、質問し、教師との質疑応答も耳にする。これが、翌週の本番で他の学生の発表を日本人の聴衆と共に聞き、質疑応答に参加する際の予行練習となる。

12週目にポスター発表を行う。会場は聴衆が集まりやすい大学のロビーを使用する。1週間ほど前から大学内各所に発表タイトルを示した告知ポスターを掲示したり、日本人学生のクラスで告知しておき、より多くの聴衆に来てもらえるようにする。聴衆は教職員と学生が部署や学部学科に関係なく自由に訪れる。留学生と交流を持ちたいと積極的に訪れる人や、たまたま通りかかって立ち止まる人もいる。発表の時間帯は二つ設定し、各90分に同時に7～10人が発表する。どちらの時間帯も休み時間や昼休みに重ねて設定する。その時間帯に発表しない学習者は、聴衆として参加する。ポスター発表開始時には留学生自身が学内放送で来場を呼びかけるアナウンスをする。

発表者はポスターの前で待機し、聴衆が集まって来た段階でそれぞれ発表を開始する。一回の発表は質疑応答を含めて10～15分である。発表の要

点や、内容をわかりやすく伝えるための写真・図・年表などを記したポスターを指し示しながら、目の前の聴衆たちに視線を配って発表する。ポスター以外の道具として、CDプレーヤーや食べ物の実物を使う学習者もある。発表時はとなりで他の学習者が発表していることもあるので、自分の聴衆が至近距離にいても、ある程度大きい声を出さなければならない。

質疑応答に関しては、質問者は掲示されたポスターを指し示して説明を求めたり、質問したりすることが多く、発表者からの応答もポスターを用いて行われる様子が頻繁に見られる。質問に対しては、学習者は原稿から離れて自分のことばで対応することが求められる。質問に答えられない場合も、その旨を伝えるなどして適切に対応しなければならない。同じことに興味をもっている聴衆からは、より詳しい意見や説明を求められたり、逆に聴衆から情報を得たりするなどのやりとりが見られる。聴衆からの質問は、前週までの練習時と異なり本番では発表終了前に出ることもある。

各学生は上記のような発表を数回行う。発表を繰り返し行うことで、その発表の場に慣れて気持ちに余裕ができると共に、発表の技術が向上する様子も見られる。また、質疑応答では同様の質問が繰り返されることで、はじめは答えられなかった質問にも答えられるようになっていく。

聴衆の来訪は時間によってバラつきがあり、人だかりができたり、閑散としたりと、一定ではない。しかし、どの学生も発表時に聞き手である日本人と近い距離で接し、発表内容についてやり取りする機会が得られる。聴衆には、発表後にその印象やコメントを記すフィードバックシートの記入を依頼し回収する。

13週目に発表のフィードバックを行う。学生に与えられるフィードバックは、教師からの評価と聴衆からの評価の二つがある。聴衆からの評価は成績には関わらない。しかし、自分の日本語力を含めたポスター発表について、日本語教師とは違う視点からのコメントを受け取ることによって、今後の日本語学習の動機付けが強化されるものと考えられる。

4.4. 成績評価

成績評価の方法は、各授業内での準備活動を見て評価する「クラス内活動」が30点、ポスター発表に関する評価が60点、それに、課題提出5点、出席率5点を加え100点満点で評価する。内わけは表2のようになっている。

表2：『ポスター発表クラス』の評価項目（100点）

1. クラス内活動 30点 (各授業内での準備活動を見て評価)		情報収集	5
		アウトラインの作成	5
		原稿（本論）の作成	5
		原稿（序論・結論）の作成	5
		スピーチ練習	5
		ポスターの作成	5
2. ポスター発表 60点	内容・構成（20点） スピーチの原稿	構成	5
		内容	5
		表現力	5
		文法的正確さ	5
	発 表（25点）	発表態度	5
		ポスターの使用法	5
		発音・アクセント	5
		流暢さ	5
		正確さ	5
	質疑応答（15点）	質問の聞き取り	5
		答え方	5
		マナー	5
3. 課題 5点			5
4. 出席 5点			5

5. 実践の成果

5.1. 学習者の評価

発表終了時に、2004年秋学期・2005年春学期の学生計27名から、ポスター発表に対する評価とコメントを得た。2～2の5段階による評価の結果は表3の通りである。

全体的に肯定的な評価を得ているが、特に「4. おもしろかった」「5. 日本語のいい練習になった」の評価は1以上と高かった。コメントを見ても、肯定的なコメントの多くは以下のような表3の結果に沿うものであった。

表3：ポスター発表に対する評価（平均値）

[2, 1, 0, -1, -2の5段階評価]

学生自身の発表	1. 上手に発表できた	0.7
	2. スムーズに日本語が話せた	0.9
	3. 質問に日本語で答えられた	0.7
全 体	4. おもしろかった	1.2
	5. 日本語のいい練習になった	1.5
	6. 日本人とたくさん話せた	0.7

〈肯定的なコメント〉

- It was interesting not so scary than I believed it would be. I was even able to enjoy of situation People seemed to be interested in my speech, it made me happy. (2004年秋学期の学生から)
- Good practice for my Japanese and fun to talk in front of the Japanese students. A bit nervous at first then it was fine. ... Good exercise.
(2005年春学期の学生から)

これらから、ポスター発表を通して、学生が日本語を楽しく練習できていることがわかる。また、上記のコメントから、学生が日本人の前で話している実感を得ていることや、発表時の聴衆の反応を捉えていることもわかる。これは学生が聴衆を意識しながら発表していることを示唆しており、3の(2)で述べた発表者と聴衆の距離に近いポスター発表のメリットが反映されているものと思われる。

否定的なコメントとしては、04年秋学期の学生から「同時に話し始めると、聞きづらい」「発表しにくい」というものが多くあげられた。これを改善するために、05年春学期は、全員が同時に発表するのではなく、できるだけ遠くに位置する学生が3人程度順番に発表していくという方法をとった。すると、2005年春学期の学生の一人からは、「一回しか話せなかった(発表する順番が一回しか回ってこなかった)」というコメントが出た。このことから、限られたスペースと時間の中で、同時に発表する人数をバランスよく調整することが重要であるとわかった。

また、2005年春学期の学生からは、「もっと多くの人に来てほしかった」「もっと話したかった」というコメントが出ていた。しかし、教師の観察

では口頭発表の時よりも聴衆の数は増えており、表3を見ても、「6. 日本人とたくさん話せた」の数値は+1には満たなかったものの肯定的な評価を得ている。「もっと話したかった」というコメントは、日本人に自分の発表をもっとアピールしたかった、もっとたくさん話したかったという意欲の表れだとも考えられる。

〈否定的なコメント〉

- 皆さんが同じ時期に発表しましたから、ちょっと失礼しましたと思います。別々に発表するほうがいいと思う。
- 込んでうるさいので、発表はしにくいです。他のところの方がいいと思います。(2004年秋学期の学生から)
- 私はよく勉強したのに、一回しか話せませんでした。
- It would have been nice if more people came to listen.

(2005年春学期の学生から)

5.2. 口頭発表からの変化

以前行っていた口頭発表と比較して、教師の観察では以下のような相違点が見られた。

まず、原稿を読み上げる学生の多かった口頭発表の時と比べ、ほとんどの学生がジェスチャーを交えた、動きのあるアクティブな発表をしていた。これは、聴衆に自分の発表を伝えたいという気持ちの現れと考えられ、2の(2)で挙げたように、発表者と聞き手の距離が近くなることで、聞き手をより意識した発表が行われていたことを示唆するものである。

また、口頭発表の際には発表終了時に聴衆に質問を促しても、質問が出されることは少なかったが、ポスター発表では発表終了を待たず、発表途中でも質疑応答のやり取りが見られた。2の(2)で述べたように発表者と聞き手との距離が近くなることで相互に発話しやすい環境が作られたこと、また、2の(3)で述べたように聞き手が興味のある発表を選んで参加することができるようになったことで、活発なやり取りが見られるようになったものと思われる。

質疑応答の際には、聴衆と発表者がポスターを指差してやりとりする姿がよく見られた。こうしたポスターを介したインタラクションは、2の(1)で述べたように、ポスターがあることで、発表者と聞き手が情報を共有し

やすくなっていることの表れだと言える。また、途中から聞き始めた聴衆がポスターから発表内容の流れを把握し、聞き逃してしまった部分に関して、ポスターを用いながら説明を求める姿もよく見られた。ポスターから発表全体を捉えることができることで、発表への途中からの参加も可能となっていた。

聴衆に関しては、口頭発表時には、日本語の授業の担当教員・留学生の友人・国際交流サークルに所属している日本人学生など、留学生が既に面識のある人に限られていた。一方、ポスター発表では大学のロビーを利用して行ったことで、学内の不特定多数の学生と教職員が訪れた。留学生の友人に加えて、告知ポスターを見て興味のあるテーマを見つけて訪れる人、会場を通りかかって興味を持って立ち寄る人など、聴衆はさまざまであった。また、学習者の日本語力や学習暦を把握していない人が多かったため、聴衆が学習者に合わせて日本語レベルを調節することなく質問している姿も多く見られた。

このように聴衆を限定しない環境で発表を行ったことで、本授業のポスター発表では、フォーマル且つ、日本語レベルの調節のない場面でオーセンティックなインタラクションを行う機会が作れたと考えている。

6. 今後の課題

上記の成果をふまえ、今後の課題としては次のようなことが挙げられる。

まず、学生からのコメントで同時に話し始めると、話しづらい、聞きづらいという意見が出されたが、これについては発表方法を工夫していく必要がある。発表の声がお互いに邪魔にならないよう、同時に話す発表者の数を限定して順番に話すようにしたり、発表者間の距離を適切にとるようにする。また、同時に話す発表者の数を限定することで、順番が回ってくる回数が減りすぎないように、一人が話す長さを5分程度とする必要がある。これまでの発表では、発表時間が長すぎる学生がおり、立って聞き続ける聴衆にも負担がかかっていた。これを改善するためにも、発表時間を確実に区切ることは大切である。もう一つ、表3で学習者自身の発表に対しての評価が比較的低かったことは、本番に近い形での発表の練習不足が影響していると思われる。準備段階では、どうしても原稿作成ばかりに時間が取られてしまうが、その後の発表練習、例えば、ポスターを生かすための練習、パフォーマンス面の練習をもっと強化して行く必要があると考える。

参考文献：

- 井之川陸美 (2005) 「タスクベースのカリキュラムに取り入れた『ポスター発表』の実践報告」『日本語教育方法研究会会誌』 Vol.12, No. 1 , pp.32-33
- 上村和美・内田充美 (2005) 『プラクティカル・プレゼンテーション』くろしお出版
- 国際交流基金関西国際センター (2004) 『初級からの日本語スピーチ一国・文化・社会についてまとめた話をするために一』凡人社
- 齋藤伸子 (1999) 「日本語母語話者を活用したポスターセッションの効果と可能性」『日本語教育論集』 15, pp.43-63
- 東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会編 (1995) 『日本語口頭発表と討論の技術ーコミュニケーション・スピーチ・ディベートのために一』東海大学出版会
- 山崎真弓・上原真知子・本郷智子 (2003) 「学習者間の自発的なやりとりを促す授業活動ーポスター発表による自国文化紹介一」『日本語教育方法研究会会誌』 Vol.10, No. 2 , pp.16-17
- 山下好孝 (2002) 「メッセンジャープログラムを利用した外国語指導ー日本語指導を例に一」『高等教育ジャーナルー高等教育と生涯学習一』 No.10, pp.93-100, 北海道大学高等教育機能開発総合センター

謝辞：

本稿で報告したポスター発表クラスの以前の形式であるスピーチコンテスト・口頭発表は、1997～2003年にかけて北海道東海大学で当時専任講師であった中道（森越）一世先生が実施されていたもので、2001年から筆者らが携わるようになった。貴重なご意見とご協力をいただいた中道先生に心より感謝の意を表します。

そえだ えりこ（藤女子大学講師）

ひらつか まり（留学生センター非常勤講師）

Poster presentation class promoting active and comprehensive linguistic performance in Japanese

SOEDA, Eriko and HIRATSUKA, Mari

This paper reports on classroom activities in a poster presentation class promoting active and comprehensive use of a variety of language knowledge and skills. In preparing the presentation, various activities are conducted in this class, such as gathering information on presentation topics, organizing content and structure, writing the speech manuscript, making the poster, and practicing speeches and question-and-answer sessions. In addition, the use of Japanese word processors is taught for writing the manuscript and preparing the poster. A variety of instruction styles are used depending on content and activities, such as lectures, seminars including interaction between the teacher and students, and individual instruction.

The results of a student questionnaire show that they enjoyed the poster presentation session and regarded it as good practice in Japanese. However, their comments reveal that their presentations sometimes interrupted each other because the all students performed them at the same time in a limited space. Compared with their earlier oral presentations, the poster presentation prompted the learners to give their presentations with awareness of the audience, and to more actively interact with them. Using the lobby in the University for the presentation enabled the learners to gain wider audience participation, and provided them with an opportunity for authentic interaction with a variety of listeners.